



TITLE:

<レファレンス事例集>事例No.108:  
20世紀初頭にオーストラリアから  
日本に帰国した医師のその後の足  
跡が知りたい

AUTHOR(S):

宮田, 怜

---

CITATION:

宮田, 怜. <レファレンス事例集>事例No.108: 20世紀初頭にオーストラ  
リアから日本に帰国した医師のその後の足跡が知りたい. 医学図書館  
2017, 64(4): 245-246

ISSUE DATE:

2017-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/229130>

RIGHT:

© 2017 日本医学図書館協会; 許諾条件により本文は2018-03-21に公開;  
許諾条件により非表示の部分があります.



## レファレンス事例集

### 事例 NO.108

#### 20世紀初頭にオーストラリアから日本に帰国した医師のその後の足跡が知りたい

##### ・質問

海外の共同研究者の依頼により、20世紀初頭に西オーストラリア州ブルームの日本人病院で活躍したDr. Tadashi Suzukiについて調査している。現地に新聞記事を元にした先行研究があり、Suzuki医師は1912年に赴任、1914年に日本へ帰国、帰国後は京都帝国大学医学部教授になったことが分かっている。京都大学（以下、本学）にSuzuki医師に関する情報（略歴、漢字表記、写真、生年月日、著作等）が残っていないかどうか調査してほしい。

[学外者, Email 受付, 2016年5月]

##### ・調査の経緯

最初にPubMedを「Broome Japanese」でハンドサーチするなどして先行研究<sup>1)</sup>を特定した。先行研究はオープンアクセス誌掲載のため、その場でフルテキストを確認でき質問者の事前情報の裏付けがとれた。

次に、事務資料「芝蘭会会員名簿」（芝蘭会は1906年に発足した本学の医学部卒業生を主たる会員とする法人）から、1908年の卒業者に「鈴木正」の名前を確認した。同姓同名の可能性は残るものの年代も一致することからSuzuki医師の漢字表記は「鈴木正」とであると推測の上、さらに調査を進めた。

続いて1997年刊行の『京都大学百年史』<sup>2)</sup>を調査した。8巻組で合計数千ページ規模という大部の資料であるが、全文が章ごとに本学の機関リポジトリ「KURENAI」で公開されているため、医学部関連の章のPDFファイル内を全文検索するなどの方法で効率よく調査することができた。調査の結果、「部局史編1」の第7章に鈴木正教授が1925年12月小児科教授に就任、1931年3月病気休職という記述を発見した。

ここまでの調査により、本学に教授として在籍時の情報は把握できたものの、その他の情報は依然として不明なままであった。そこで見方を変えて、前記の先行研究<sup>1)</sup>162ページに鈴木医師が医学雑誌を創刊した（“founding a medical journal, the Oriental Journal of Diseases of Children”）という言及があった点に注目し

この雑誌を調査することにした。

本学蔵書検索システムにて、タイトル欄に「oriental journal diseases」、言語コードに「日本語」を指定して検索したところ、本学医学部の小児科学教室が編者である『乳児學雑誌』（欧文タイトル“The Oriental Journal of Diseases of Infants”）がヒットした。所蔵資料であったため、鈴木教授在籍時期前後の巻を一通り確認したところ、1933年発行の第13巻の編集雑記の中に、療養中の鈴木教授が4月1日にご逝去されたとの記述を発見した。また、巻末に英文2頁の鈴木教授への追悼文<sup>3)</sup>の掲載を確認した。ここまで得られた情報の他に、生年月日（1883年4月22日）やブルームから帰国後本学教授就任までの来歴（帰国直後に本学の講師に任命、1918年に学位を取得、その後1919年から1925年まで満州に渡り大連病院に勤務）も明らかになった。追悼文の前の紙葉には研究室で撮影された白黒の写真が掲載されていた。

著作については、本学医学部小児科教室発行の『京都帝国大学医学部小児科教室原著論文抄録集』<sup>4)</sup>や『乳児學雑誌』から多数の鈴木教授による原著論文を確認した。

##### ・回答

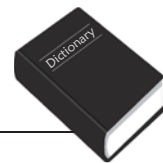
上記の内容を『乳児學雑誌』の記述を中心に生年から没年までの来歴を整理してメールで回答した。回答までに要した日数は2日であった。

##### ・補足

古い年代の教員や講座に関する質問はしばしば寄せられるが、資料の欠落等により詳細に回答できないことが多い。しかし、このケースについては先行研究や所属講座の刊行物に直接的な記述が残っていたなどの幸運に恵まれ充実した回答を返すことができた。

まもなく1970年代に相次いで創設された地方大学の医学部が50周年を迎えることもあり、これまで記念誌編纂等の機会がなかった図書館であっても、機関や教員の由来に関する相談を寄せられる可能性がある。

資料の散逸等により毎回十分な回答ができるとは限らないが、自身の所属機関や講座、教員等の来歴を尋ねら



## レファレンス事例集

れた場合にどのような調査手段があり得るか一度整理しておくことは有益だと思われる。

### ・情報源

- 1) Stride P, Louws A. The Japanese Hospital in Broome, 1910-1926. A harmony of contrasts. [internet]. J R Coll Physicians Edinb. 2015;45(2):156-64. <https://doi.org/10.4997/JRCPE.2015.215> [accessed 2017-08-31]
- 2) 京都大学百年史編集委員会. 京都大学百年史. 京都:京都大学後援会;1997-2001. [internet]. <https://hdl.handle.net/2433/152877> [accessed 2017-08-31]
- 3) Memoir of Tadashi Suzuki, M.D.. 乳児學雜誌. 1933; 13:(頁付けなし[巻末 p.36 と p.37 の間の 2 枚の紙葉]).
- 4) 平井毓太郎 (ほか). 京都帝国大学医学部小児科教室 原著論文抄録集: 平井教授退職記念編輯. 京都: 京都帝国大学医学部小児科教室;1925.  
(京都大学医学図書館 宮田 怜  
[medlib@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:medlib@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp))